それぞれの最終楽章

「一人称」の死へ 1

落語で見送った友、愛妻のための葬儀

僧侶・高橋卓志さん

1948年長野県生まれ。91年から松本市にある臨済宗「神宮寺」住職を務め、2018年退職。龍谷大客員教授。著書に「寺よ、変われ」「さよなら、仏教」など。

十数年前、そば職人だった僕の親友Oさんの葬儀を執り行いました。もともと松本市内で有名な料理屋を営んでいた男性でしたが、その後に山奥へ引っ込み、小さなそば屋の主人になったんです。

彼が打つそばはとにかく絶品。都会からもファンが足を運ぶ店でした。そんなOさんが60歳を過ぎたころ、がんが見つかりました。どんな治療をしても治らず、僕は病室に呼ばれ、「多分、近い。高橋さんすべてよろしく頼む」と言われました。死の3日前です。

亡くなるとすぐ、神宮寺へ搬送されました。妻のMさんの悲嘆は大きい。僕は、彼の最期のメッセージに〈これまで面倒をかけてきた妻が納得できる葬式を〉という配慮が込められていたことに気づきました。

生前のOさんは落語にも精通し、僕らの共通の友人に落語家のSさんがいました。僕が「葬儀で一席やってほしいんだけど」と頼むと、「やりますよ。演目はもちろん『時そば』だよね！」と快諾してくれました。

寺の敷地内に建てたホールの葬儀に約300人が参列するなか、まず禅宗方式の葬儀が営まれました。その後、祭壇前に落語家Sさんが座りました。Oさんの遺影へ語りかけるように演目を披露し始めました。噺はいよいよオチへ。

「ひい、ふう、みい、よ、いつ、……いまナンドキだい？」。

Sさんはそう言った後、天井を見上げたまま絶句してしまった。僕が内心不安になりかけた時、パチ、パチパチと会場の一角から拍手が聞こえてきました。

すると、瞬く間に全体へ広がったんです。誰もがOさんの人生をたたえ、泣き笑いで手をたたいている。これこそ葬儀だ。やまない拍手に包まれた妻のMさんを見て、僕はOさんとの約束を果たせた気がしました。

僕は、松本市浅間温泉にある禅寺の一人っ子として生まれました。寺の後継ぎとして育てられ、僧侶になった。しかし少年時代、「おまえの家は人が死ぬともうかる」と友人にからかわれたトラウマから、通夜に行くのが嫌でたまらなかったんです。悲しむ遺族を前に何も出来ない自分を自己嫌悪していました。

そんな生活が3年も経ったころ、インドネシア・ビアク島を訪れました。戦没者慰霊の旅に参加したのです。約千人が亡くなったという洞窟の内部に無数の遺骨が散乱する中、僕がお経を読んでいると、一人の女性が泣き崩れ、足元の泥水に伏して転げ回り始めました。ここで戦死した夫の妻でした。

読経を続けられなくなった僕を、法要の引導役の山田無文老師が「しっかり読まんか！」と一喝しました。そこから生き方は劇的に変わりました。人々の悲しみや痛み、苦しみを和らげるのが自分の役目だと心に刻んだのです。

（構成・高橋美佐子）＝全6回

朝日新聞デジタルの医療サイト「アピタル」で、詳しくご覧になれます。